

氏 名 おもにし まさと
表西 政人

学 位 博士（芸術学）

学位記番号 博（芸）甲 第 36 号

学位授与年月日 平成 30 年 3 月 31 日

学位授与の要件 学位規程第 3 条第 3 項該当

論文題目名 武藝と禅
澤菴禅・「如今の開覚」に於ける「義」
と「己」の劍禅一如

審査委員 主査 山口 義久

副査 倉澤 行洋

同 渡邊 哲意

1. 論文内容の要旨

本研究の要旨は以下の通りである。

本論文は、澤菴の劍禅一如の「義」と「己」について、さらに「如今の開覚」の思想について明らかにすることを目指す。澤菴の生涯や行状・人柄を知るには『東海和尚紀念録』が好適であるが、澤菴の「義」と「如今の開覚」の思想がどこから生じたかについても、この書を通読することから窺い知る事が出来るということが、その内容をもとに最初に指摘される。

劍禅一如と言うと、武士の武藝と禅とはどのような関係において結び付いたのかという疑問が生じる。禅宗は、鎌倉の初めに宋から伝えられ、武士の気風に合って広く信仰を受けた。同時代には法然の浄土宗が京都で受け入れられるに至ったが、浄土宗では称名念仏により他力としての仏の御手にすがって極楽浄土への往生を願うのと対照的に、禅宗は、如今（此の世）で、自己の精神の鍛練、心の修養によって自己を仏の位に高めようとする。このような、自己の力によって物事が正されるという考え方は、武士の自力によって善き功績を成そうとする考え方と共通し、それに必要となる苦行は、武士のような勇猛の心を持った人々によって、はじめて成し遂げられるものである。

「自己を仏の位に高めようとする」とは、心を修めて、世に存在する総ての事物を見通し、生死の迷いを断って自ら仏にならんとすることである。そのように執着を断ち切る事によって事物を本来の姿で見ようとするのが武藝における修行の根本精神である。このような境地を求めて、武士は武藝の修行とともに禅定も行い、精神修養に精励した。このような事情から、他力往生を説く浄土教よりは、一大事を究めようとする禅の教えの方が、死を厭わず戦時に臨む武士に適していた。ここに、武士の武藝と禅の結び付きの理由がある。

「如今の開覚」と「公」なる「義」の劍禅一如については、澤菴の『玲瓏集』から理解することができる。「如今の開覚」とは、今現在・現生における「覚」を開くことであり、浄土宗の「来生の開覚」すなわち浄土に往生して覚りを開くことと対照的である。禅の自力行、聖道門においては、「唯心の浄土」、「己心の弥陀」すなわち、阿弥陀仏も極楽浄土も自己の心の中にあるということが強調され、劍禅一如となる禅の立場の基本的な考えとなっている。

澤菴は「義」の大切さについて、それは天の理であり、人の身に受けて性となると言う。また、物事をなすのは欲念によるが、中正の心を規範としてそこから外れないものは欲念と呼ばれず義と呼ばれると言う。欲念を離れては何ご

ともなすことは出来ず、無欲の義に叶うのが道だという仕方、澤菴は即心即仏の心と非心非仏の心を説いている。ここに「義」の禅的要義を見ることができ、他方で、武士にとつては、武家の棟梁たる「主」を心に持つことが「義」とされる。澤菴は「君臣の道」を、「神の道」に譬えて最上級の位置付けをしている。武士は剣をもって主君に仕えるものであり、このことによつて、「義」という見地において武藝者と禅心が一如となるのである。

澤菴の『不動智神妙録』によつて、本論文のもう一つの主題である、「己」の劍禅一如について明らかにすることができる。「不動」とは動かさずと云う文字で、「智」は智慧の智であると澤菴は説明している。「不動智」とは、心が動きたいように動きながら少しも止まらぬ心のあり方であり、無明住地煩惱に動揺しない心のこともある。これは「己」における「如今の開覚」と言える。

そのような不動智が開け道理を理解すれば、仏法は劍というただ一つのものによつても根本の理を表すものである。そのことを澤菴は、「佛法はよく一物にして其の理を顯はす事にて候」と記し、「己」の劍禅一如と表現できる思想の核心を述べている。この「己」の劍禅一如の本質は、「無心無念」の境地であり、剣を遣う手足身がひとりにて自在に動き、作為の心が一切入らぬ「至極の位」である。

修行としての「己」の劍禅一如の「用」については、三つの観点から理解できる。まず事理の修行がある。「理の修行」とは、無心になることであり、「事の修行」とは、さまざまな習い事のことである。これらは車の両輪の働きのようではなくてはならない。次に修行時における心の持ち方については、不退転の心のあり方をもって修行しなければならぬ。そして心の置き所としては、ただ一所に心を止めない工夫こそがすべて修行であるとされている。

修行の目的となる「己」の劍禅一如の極意とは、まず「間髪を容れず」がある。禅の観点からは、煩惱が心に残るのを避けるために必要なことである。またそれは「心を止めぬ」こととも表現される。澤菴が述べる「止まる心を生じつつも、其の事をしながらも手の止まる事が無い」と云う事は、「非心非仏」の境地とも云える。「應無所住而生其心の心を見性すれば、仏と呼ばれる」と『六祖壇経』にもあるように、武藝者に於ける剣はそのことによつても「仏」となるのである。

澤菴が柳生宗矩に言う、「貴殿の兵術の正しい心」とは、真心を込めて国家や主君に仕え、臣としての本分を全うする「忠」という事である。人の見知らぬところで「私」の不義を退け、小人を遠ざけ、賢者を登用することを急務とす

れば、国の政は正しくなり、忠臣第一になるとして、「己」における劍禪一如は、「大忠なるもの」が本務だと説明しているのである。このように、「己」の劍禪一如の説明は、「応無所住而生其心」と「大忠」との二段構えとなっていることが、本論文の新しい指摘の一つである。

武藝は、武術である柔術、劍術を含むものの総称である。論者は講道館柔道を実践している見地から、澤菴禪の劍禪一如の思想が柔術にも共通することを論じる。とりわけ、柔術竹内流の伝書『無名住地煩悩不動智』と、澤菴の『不動智神妙録』とは、前者における七項目すべてが後者と同内容であることを、詳細に検討して結論づけた。これは時系列から見て、前者が後者を典拠としたものであることが明らかである。また、澤菴と同時代の起倒流についての考察も踏まえて、柔術各伝書と『不動智神妙録』の主旨が共通していることを確認し、柔術の「不動智」を探究するには、澤菴の『不動智神妙録』に基づかなければならないと論じ、劍禪一如であると同時に、柔禪一如であると総括する。

以下に、本論文の目次を掲げる。

序章

第一節 武藝と柔剣術「万芸一心に有り」

第二節 禅と澤菴『不動智神妙録』の劍禪一如

第三節 研究方法

引用文献及び註

第一章 『東海和尚紀念録』に観る澤菴

第一節 澤菴

第一項 澤菴の文書

第二項 澤菴の年譜行状

〔一〕 宗朝の序と澤菴の出自

〔二〕 澤菴の仏道門と春翁・秀喜・宗彭・澤菴

〔三〕 大徳寺第一座と伶牙利舌漢、眞跨竈児

〔四〕 大徳寺第一五三世

〔五〕 紫衣の事

〔六〕 東海寺澤菴和尚

〔七〕 夢一文字

〔八〕 年譜行状に観る澤菴

- (1) 道門の師
- (2) 「義」に就いて
- (3) 「如今」に就いて
- (4) 『金剛般若経』と夢一文字

小括

引用文献及び註

第二章 澤菴と武藝、其の内なる「不動智」

第一節 柔術に就いて

第一項 柔術・渋川流と天神真楊流

第二項 柔術の起源、そして起倒流と嘉納治五郎

第三項 柔の名儀（義）

第四項 柔術の内容

第二節 柔術と剣術に通底する「不動智」

第一項 『不動智神妙録』の項目

第二項 竹内流『無名住地煩惱（悩）と諸仏不動知』と澤菴の『不動智神

妙録』経（たて）の対比、分析、考察、其の連続性

第三項 澤菴と起倒流、緯（よこ）の連続性

小括

引用文献及び註

第三章 武藝と禅

第一節 武藝と禅における結び付きの関係性に就いて

第二節 浄土宗と武士

第三節 禅宗と武士

小括

引用文献及び註

第四章 澤菴『玲瓏集』依り「如今の開覚」と「義」の剣禅一如

第一節 『玲瓏集』の「二遍上人の法灯国師参禅」

第二節 『二遍上人語録』の「二遍上人の法灯国師参禅」と浄土宗「来生の

開覚」

第三節 『無門関・禅箴』の「念起即覚」

第四節 『無門関』・「即心即仏」の提起と南無阿弥陀仏なむあみだ仏

第一項 『無門関』の特質

第二項 『無門関』と『臨濟録』の関係に就いて

第五節 『無門関』第三〇則・「即心即仏」、第三三則「非心非仏」

第一項 『無門関』第三〇則・「即心即仏」

第二項 『無門関』第三三則「非心非仏」

第六節 唯心の浄土、己心の弥陀と「如今の開覚」

第一項 唯心の浄土、己心の弥陀

第二項 『臨濟録』依り「如今」の義に就いて

第三項 鈴木正三『驢鞍橋・中』依り過去・現在・未来の区分

第四項 「如今」と『碧巖録』第一則「武帝問達磨」

第七節 『安心法門』依り、「廓然無聖」と「如今の開覚」

第八節 『玲瓏集』依り「義」の本義、「公」に於ける「君臣の道」

第一項 「神の道」と「君臣の道」

第二項 「主と云う道」、「臣たる道」

第三項 「君臣主従の道」→主への「義」

第九節 『玲瓏集』と「如今の開覚」、そして「義」の劍禅一如

小括

引用文献及び註

第五章 澤菴『不動智神妙録』依り「如今の開覚」と「己」の劍禅一如

第一節 「仏法」・「禅」・「貴殿の兵法に於て」と云う三つの術語 (technical

term)

第二節 止(とど)まる心 → 無明住地煩惱

第三節 止(とど)めぬ心

第一項 「如今の開覚」と「不動智」

第二項 急水上打毬子、念々不停留

第三項 前後際斷

第四節 千手観音と即心即仏・非心非仏に観る「己」の劍禅一如の本義

第一項 貴殿の兵法の心正しければ

第二項 諸仏不動智②

第五節 「己」に於ける劍禅一如の体

第一項 「己」の劍禅一如の体

第二項 「無心の心」と『菩提達摩無心論』

第六節 「己」の劍禅一如の用

第一項 事理の修行

第二項 具不退轉く心の持ち方の修行

第三項 心の置き所の修行

第七節 「己」の劍禪一如の極意

第一項 間髪を容れず、石火の機く極意

第二項 水上の胡蘆子を打つ、捺着即轉く達人の心

第三項 求放心（孟子）と心要放（邵康節）・具放心（中峰）く至極の時

第四項 應無所住、而生其心く至極の位

第五項 敬（敬白）、主一無適（せき）・一心不乱——即心即仏と、應無所

住而生其心（至極の位）——非心非仏

第六項 「應無所住而生其心」と「己」の劍禪一如

第八節 「己」の劍禪一如 く 「忠」

小括

引用文献及び註

第六章（結）

第一節 論旨

第二節 武藝と禅く「不動智」と現代柔道

2. 論文審査結果の要旨

(1) 研究テーマの独自性

澤菴の禅思想の立場に立った武藝論について、「義」と「己」という見地から理解しようとしたのは、論者独自の着眼である。また、澤菴の禅の立場を浄土宗の他力信仰との対比において「如今の開覚」と特徴づける点にも、論者の独自性が現れている。

(2) 研究方法とその成果

論者はこのテーマを追求するために、澤菴の諸著作や関連する仏教書、さらには柔術の諸伝書に当たり、丹念に読み解く方法をとっている。その成果として、澤菴の武藝思想に新たな光を当て、公としての「義」の見地と、私としての「己」の見地から、その禅仏教的な意義を明らかにした。また、柔術の伝書に関しては、竹内流伝書が澤菴の『不動智神妙録』に依拠していることを実証的に裏付けた。

(3) 残された課題

このように本論文は、澤菴の武藝論の禅仏教に根ざした特質を解説するものであるが、それが武藝論としてどのように意義づけられるかという考察には、あまり踏み込んでいない。今後の研究の進展に期待されるところである。

3. 最終審査結果

以上、本研究の独自性、文献その他を活用する研究方法とその成果という観点から検討した結果、審査委員一同、一致して本研究が博士の学位論文の水準に到達していると結論つけた。